

「ヒトは他者の顔色を見ながら他者の行為を理解する」

→いろいろ考えさせられます(^_^;)

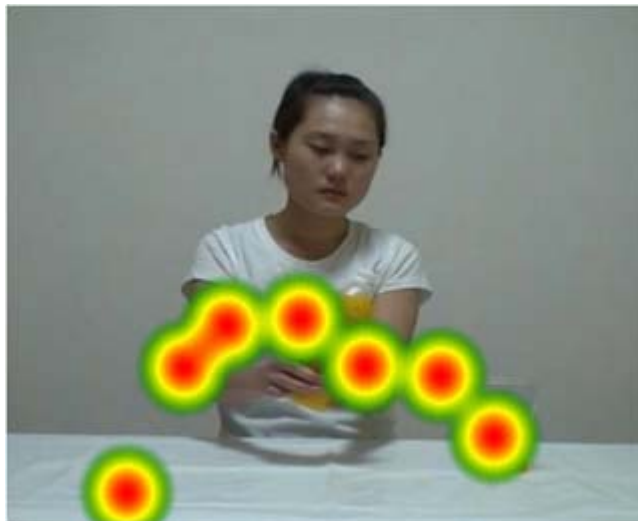
新宮昌樹

下の2つの写真をご覧ください。左がチンパンジー、右がヒトです。それぞれディスプレイの前に座って何かを見えています。チンパンジーは12歳、ヒトは生後12ヶ月の乳児です。



何を見ているのでしょうか。実は、二人？は、人（他者）がコップにジュースを注ぐ動作を見えています。もちろん、両者は同じ内容のものを見えています。では、その結果はどうだったのでしょうか？このふたりに相違点はあるのでしょうか？

まずはこの写真（写真1）から。アイ・トラッカーという計測技術を用いて視線計測をしています。これを見ると、人の手元やジュースの入ったペットボトル、そのジュースが注がれるであろうグラスなどに視線が向けられています。どうやら、動いているものや物体に注目しているようです。



（写真1）

では、次の写真（写真2）はどうでしょうか。手元の動きとペットボトルとともに、相手の顔を目に注いでいます。他者の表情（顔色）を見えています。ジュースが注がれるであろうグラスには視線を向けていません。



(写真2)

この2つの写真を比べると、その違いは一目瞭然です。どちらがチンパンジーで、どちらが生後12ヶ月のヒトだと思いますか？

答えは、写真1がチンパンジー、写真2が生後12ヶ月のヒトの視線の動きです。この実験の結果、ヒトの乳児は、他者の行為を観察する間、チンパンジーに比べて、長時間、他者の顔に視線を向けることがわかりました。一方、チンパンジーは、他者の顔を見ることは非常に少なく、一貫して物に視線を向けました。

なぜこういう実験を紹介したのか。理由があります。ある認定こども園を見学した時に遭遇した、0～2歳児の保育室の風景を思い出したからです。整理整頓された（見方によっては殺風景な）保育室の中央に小さなベッドがあって、そこで寝ている乳児。少し離れたところに保育士。当然のことながら母親の事情で長時間にわたり預けられているのですが、そんな状況を目の当たりにして、なんとも言えない気持ちに襲われました。

そんな体験をした後しばらくして、この実験をおこなった京都大学のプレスリリース（※）をたまたま見つけたのです。上の写真と、見学時に感じた漠とした思いが、細い糸でつながったような気がしました。あの写真を見るたびに、今でもいろいろなことを考えさせられます。あの乳児は、あの保育室で毎日、何を見ているのだろうか？乳児の視線の先が保育室の天井ばかりなら寂しすぎる？あの静かな部屋で音の刺激はあるのだろうか？母親よりも長く接しているかもしれない保育士という存在は、乳児にどんな影響を与えるのだろうか？いわゆる「三歳児神話」は本当に神話なのだろうか？

母親の顔、父親の顔、兄弟姉妹、祖父母、親戚、家庭の雰囲気、部屋の様子、さまざまな生活音・・・少なくとも乳児の間は、特別な事情がないかぎり、そういう身近なものに日々囲まれて育つことが自然であり、似合っているような気がします。

待機児童問題が喧伝される中、保育所の必要性も認めつつ、少なくとも自分自身の経験や身の回りの環境において三歳児神話は有効だったような気がします。そんな思いを唯一の拠り所として、そこにヒトの乳児の視線を重ね合わせることで、何か見えてくるものがあればと願っています。

※京都大学プレスリリースのURLはこちら。

http://www.kyoto-u.ac.jp/ja/news_data/h/h1/news6/2011/120222_1.htm

「ヒト特有の学びのスタイル」で検索するとヒットします。